

心子初メテ
Ti·O·Ri
姫織

小説 岡下 誠

挿絵 あきら

立ち読み版

序章	
第一章	メイドの一日
第二章	性の手ほどき
第三章	主人のたしなみ
第四章	かどわかし
第五章	牝メイドのお披露目
終章	

登場人物紹介

Characters



あいばら ひおり

相原 姫織

優に仕えるメイド。日本人男性とイギリス人女性との間に生まれたハーフで、一本鞭の使い手。ちょっぴりサディスティックな性格。

たちばな ゆう

立花 優

姫織の主人である少年。面立ちは可愛く、十六歳の年齢よりも幼く見える。優しく穏和な人柄。

たちばな れいか

立花 麗香

優の従姉。二十八歳の若さで企業グループを束ねる才女。

この美しいメイドの裸身をまだ目にしたことのない優は、年頃の男の子としてはごく普通の反応として、白いエプロンにできた大きな隆起について魅入ってしまい、衣服の下に隠されている官能的な肢体に想像を逞しくするのだった。

「優さま、どうかなさいました？ 私の顔になにかついておりますか？」

やさしい笑みを浮かべたまま姫織は小首をかしげると、頭につけている純白のカチューシャもそれに合わせて小さく傾き、真っ直ぐで長い黒髪がごくかすかに揺らめく。

「な、なんでもないよ……」

バストのふくらみを凝視していたことを見咎められたと思った少年は、慌てて視線を泳がせて、年上の美しい女性の追及を逃れた。心臓はドキドキと高鳴り、頬はカッと赤らんでいて、とてもではないが「なんでもない」という態度ではない。十五歳にしてこの屋敷の主人である優は、使用人であるはずの姫織に対してはなんとなく頭が上がらないのだ。

「そうですか」

薄くルージュが引かれた唇の端がわずかに上がり、しかも青い瞳が悪戯っぽく少年を見つめているが、男の子のぶしつけな視線について姫織はそれ以上のことは言わなかった。

ほっとした優は、またしようこりもなく年上のメイドの美しい立ち姿を見つめる。ぐんと突き出た胸のふくらみばかりに目が行かないように気をつかいながら。

姫織が着ているのは、ごく簡素なデザインのメイド衣装である。

一見しただけでは黒のワンピースのように見えるが、同じ生地を使って仕立てられたブラウスとスカートとの組み合わせだ。いわゆるツー・パート・ドレスで、共布であるために上下の統一感が損なわれることはない。襟まわりは普通の白いシャツ・カラー。カフスもよく見かける単純な形である。が、新品と変わらぬ白を保たれたカラーとカフスとは、ブラウスの黒を一層強調していた。

新雪のような白色のエプロンは胸当てがついた形式のもので、ピナフォアという型である。肩紐から胸当てにかけての両脇には、飾り布を縫い縮めたフリルがあしらってあった。前掛け部分は面積が小さい丸形で、繊細なレース飾りでその周囲を縁取っていることからわかるように、実用面よりも装飾性に眼目を置いたものだ。

それだけならばありふれた制服であるが、豊かな乳肉によって内側から押し上げられてきている巨大なふくらみが少年の視線を惹きつけてやまない。そもそも制服とかお仕着せといった類の衣装は、着る者の体型を標準化し、それによって個性を封じ込めようとするもののはずである。しかし、黒と白という至極シンプルなメイド服を着てさえ、成熟した大きな胸の線を覆い隠すには至らない。

量感ある肉の塊は黒いブラウスの中で窮屈そうに押し合いへし合いし、その丸みは、はつきりと布地にかたどられていた。ブラウスの胸部分にスイカやメロンを無理矢理に二つ詰め込んだかのようなふくらみ具合である。

その上からエプロンがかぶさってくるものの、それにもめげずに姫織の胸はその存在を誇示している。純白のエプロンでは覆いきれない裾野の丸みが胸当ての脇から覗いていて、ブラウスの下に埋蔵されている球形の乳肉の大きさを想起させた。もし彼女が恥じらって胸を覆い隠そうと試みても、おそらく、どうやったところで二本の腕だけでは豊穣な乳房を人目から完全に遮ることは不可能だろう。

「優さま、朝食の支度が整いましたので、寝間着を着替えてくださいませ。私がお手伝いいたしますわ」

白いエプロンを押し上げている胸のふくらみは、青い瞳のメイドがわずかな動作をしてすら反応してゆさゆさと弾んだ。黒のハイヒールを鳴らしながら寝室内のクローゼットに向かつて歩いているときなどは、もう、これ見よがしと表現するしかないほどに大きな振幅で上下に揺れ跳ねている。それを見ている優は、布団の中から亀のように首を伸ばしたまま、ぼかんと口を開けてすべての思考を停止させていた。

メイド服を身にまとった女性は、クローゼットを開けて優の制服を取り出している。

「あら？ ネクタイは……どこに行ってしまったのかしら……」

衣服の間に紛れ込んでしまったのであろうネクタイを探すために、姫織は身を屈めた。

その瞬間、少年は反射的にベッドから身を起さず。ベッドの縁から身体を乗り出して、白人の血を引いた麗しのメイドの後ろ姿を凝視した。主に彼女の尻を。

姫織が穿いているスカートは丈が極端に短い。

ミニを通り越したマイクロミニの裾からは、普通に立っていてさえ太腿の半ば以上が露出していた。むっちりとしていながらもよく引き締まった美脚には、薔薇の模様を透かした黒のストッキングを穿いている。男性の前で脚を剥き出しにしているのははしたない、あるいは恥ずかしい、という女のたしなみとして身につけているわけではないようだ。

むしろ、装飾を凝らせたストッキングを穿くことによつて、彫刻されたように完璧なラインを描いている脚をさらに美しく妖艶に飾り立て、密かにナルシズムを満足させている様子だった。その証拠に、姫織は同じデザインのを二日と続けて穿いたことはなく、しかも一日として大人しいものをつけたこともない。同じデザインのメイド服を毎日着ていることへの反動で、ストッキングを替えることでおしゃれを楽しんでいるのだろうか。

それにしても、マイクロミニのスカートを穿いていることといい、考えようによつては、まだ年若い主人を性的に挑発しているようにも思える。が、だからといって姫織の胸や脚を注視しようものなら、いきなり彼女はメイド・モードから家庭教師モードにチェンジして、「どこをぞご覧になっているのですか」と厳しい視線を投げてよこす。時にはお仕置きをされることもあった。

しかし、彼女がこちらに背を向けて上体を屈めている今、優にとつては絶好の機会だ。床に身体を這わせるようにして頭を下げ、スカートの中を覗き込む。

マイクロミニの裾はずり上がりぎみになっており、しかも、むっちりとした太腿は開き加減になっていたので、その間から成年女性の秘められた部分を垣間見ることができた。ストッキングの上部は薔薇紋様のレースになっており、それを吊り下げているのは、同じく黒一色の絹糸で織り上げられたガーターベルト。脚の付け根に近いきわどい部分の肌は、まぶしいまでに無垢な白。

女として最も秘密にしておくべき箇所につけている薄布は真黒色で、白い肌の色と好対照をなしていた。

尻を覆い隠すはずのバック部分は、布ではなく带状の『紐』である。幅の狭いそれは、通常でさえ尻肉の合わせ目をカバーするのが精々であろうが、着用者が屈んでいる現在では、肉の割れ目に食い込んでしまっていた。おかげで尻肉はほぼ丸見え。肉づきがよくやわらかそうな臀部は美の女神の祝福を受けたかのような丸みを帯びており、姫織の動きに合わせてぷりぷりと揺れくねる。ぴんと張りつめた肌は瑞々しく、絞られたの乳を溶かし込んだようになめらかだった。そこから立ち上っているかに思える牝体香に当てられた優は、後先かまわずそこに顔をうずめたくなる。

股間を覆うという大役をあてがわれた前布も、その面積は頼りないまでに小さい。逆三角形の各辺は内側に大きくえぐれ込んでいて、下腹部を隠すためというよりは、ぎりぎりで秘唇を覆うことを意図してデザインされているようだ。

そればかりか、秘唇が当たっている箇所だけがシースルーになっている。

固唾を飲んで見守っている優の視線からは、姫織の下腹の最下部に刻まれた縦の肉割れを少しだけ見ることができた。しかしそこから先、つまり股間に横たわる女性器の全体像は、黒いものに覆われて視認することができない。恥丘の周囲が肌色なのだから、そこがシースルーになっているのは明らか。つまり優が目にはしているのは、憧れのお姉さんの性毛なのだ。それに気づいた少年は、己の心臓がバクバクと暴れるのを感じていた。貴族のと称しても全く違和感のないほどの美貌を持つ姫織が、実はあんなに濃く下草を茂らせていたかと思うと、異様な興奮に見舞われて華奢な身体がぶるぶるとふるえる。

(う……いけない。姫織さんに見とれていたら……)

心の中で優は、たりつと脂汗をしたたらせた。健康な男子が朝を迎えればごく当然に起こる生理現象が、いつの間にか股間に現れていたからだ。ただでさえ起き抜けであるというのに加えて、生まれて初めて目の当たりにする女性の恥部。おかげで若い血潮は大量に海綿体へと流れ込み、まだ女性を知らない男性器は勃起の極に達している。

「あ、ありましたわ。私としたことが、昨日、下に落としてしまったようです」

不自然な姿勢でベッドから身体を乗り出していた優は、大慌てで布団の中に戻った。

優がそうするための時間をつくってやるかのように、姫織はゆつくりと身体を起こしてふり返り、気品ある顔になまめかしい笑みを浮かべる。

紺のブレザーと灰色のストラックス、よく洗濯された白いワイシャツを腕に抱え、美貌のメイドは少年がいるベッドの方に歩いてきた。一步ごとに、ストッキングにつつまれた太腿がこすれあい、胸に張り出した大きなふくらみがユサンユサンと上下に跳ね踊る。

「さあ、優さま、起きてくださいませ。早くなさいませんと学校に遅れてしまいますわよ」
ベッドサイドまでやってきた麗しのメイドは、主が着替えるのを手伝うために傍らにひかえていた。香水と体臭が微妙にブレンドされた大人の女性の香りが少年の鼻孔をくすぐり、若い男根をますますいきり立たせる。

(いや……起きてはいるんだけど……ペニスが)

こんなのを見られたら即お仕置きものだ。それ以前に、生理現象とはいえ、股間をふくらませている姿を年上の女性の目にさらすのは恥ずかしかった。

幸いにして下半身はかけ布団の下に隠れており、押し上げられたズボンの布地がテント状態になっているのは外からは見えない。優は、布団をしっかりと握ったまま、顔を赤らめながらモジモジしているしかなかった。

「優さま、いつまでぐずぐずなさっているのですか」

形のよい唇にはまだ微笑をたたえているが、青い瞳がかすかな怒気を帯び始めている。

(うっ、お仕置きの前兆だ……)

しどろもどろになって優はその場を取り繕おうと懸命になった。

「あ、あの……自分一人で着替えるから、姫織さんは先に食堂に行つてよ……」

「いけません。私が少しでも目を離せば、また布団にもぐつて寝てしまうのですから」

それでもまだ布団を手放そうとしない男の子を見て、黒と白のお仕着せに身をつつんだメイドは、スカートのポケットに手を差し入れた。再び引き抜かれた手に握られていたのは、棒状をした黒い柄に革の編み紐を絡めたもの。中世ヨーロッパの拷問をあつかった恐ろしい版画に出てくるような責め具であった。

俗に一本鞭と呼ばれるものである。

柄の部分には黒い皮革が巻きつけられて、すべり止めの役割を果たしていた。打擲部分ちようちやくは細く長い革紐を編み上げたもので、長さは優の身長ほどもある。先端からグリップまでが全て黒光りしており、圧倒的なまでの威圧感をもって少年を威嚇していた。

そう。主人であるはずの優がメイドにしか過ぎない姫織に対してなんとなく従属感を抱かざるを得ないのは、この鞭のせいであった。聞くところによるとあの一本鞭は、優の父親である篤志あつしから託されたものらしい。息子の教育のために必要な時にはいつでも使つてくれ、と言われたそうだ。その類の話を中国史で読んだような気がする。

学校の成績が悪いという理由で姫織から鞭を受けたことはない。が、勉強の最中だといふのに優の視線が女家庭教師の胸のふくらみばかりに気をとられていたときや、こっそりと彼女の着替えを覗いたときなどには、容赦なく懲戒権を行使された。

屋敷の中で姫織と二人で暮らしているのだから、健康な男の子としては理性を働かせるのに苦勞する住環境だ。また、優は、鞭による姫織の懲罰を恐れながらも、どこかそれを期待している自分に気づき始めていた。

背が高く官能的な肢体をしたメイド。白人の血を半分受け継いで青い瞳と雪白の肌をした彼女が黒い鞭を手にしている……。

大人になりかけている少年は、鞭に対して恐怖を抱きながらも、華麗かつ優雅な姫織の姿に我知らず魅入られてしまっていた。仕置き道具を目の当たりにしたというのに、優の下半身でそそり立っている分身は萎えることを知らないままビクビクと脈動していた。

「優さま、いつまでも聞き分けのないことをおっしゃっていると……」

澄みきった青い目で静かに主人を見つめながら、ゆっくりと姫織は利き腕を振り上げる。折り曲げた肘を高く挙げ、限界まで持ち上がったところで一瞬だけ腕を制止した。

それから一気に振り下ろす。

腕のしなりと手首のスナップを利かせながらも、身体のその他の部分は余分な動作を一切していない。優美な身体動作によって鞭が空を引き裂き、床を打った。

ピシユッ！

革の束が奏でる鋭い音に、優は思わず身をすくめる。

その一瞬の隙を衝かれて、かけ布団をひっぺがされてしまった。

「あ、だめっ！」

狼狼のあまりに女の子のような高い声で叫んでしまったことを恥じる間もなく、ズボンの布地が不自然に持ち上げられているのが麗しのメイドの視線にさらされた。

「まあ……」

気品ある美貌に含み笑いのようなものがよぎったように思ったのは、気のせいであろうか。すぐに真顔になった姫織は厳かな口調で告げた。

「優さま、なんですか、このはしたない有様は？」

「そ、そんなこと言われたって、朝だから……」

この屋敷の主は、恥ずかしさにいたたまれずに股間のふくらみを両手で隠しながら弱々しく抗弁してみる。

「朝だからなんだと言うのです。そんな所をふくらませたままで学校に行かれるおつもりではないでしょうね」

優のペニスが大きくなったままであるのは、肉感的な姫織の身体と色香にあふれたメイド服に起因するところが大であるのだが、そんなことを言おうものなら、今度こそ鞭でひっぱたかれそうだ。

「野蛮で低脳なそのでっぱりをご自分で制御できないとおっしゃるのですしたら、この姫織が鎮めて差し上げますわ」

黒一色のブラウスとマイクロミニスカート、純白のエプロンを身につけた美貌のメイドは、紅を差された唇に蠱惑的とも受け取れる笑みを浮かべながら、優がもたれかかっているベッドの背もたれを指し示す。その意味するところは、そこに両手をつけて腰を突き出す姿勢になれ、ということだ。

つまり、優はお仕置きを宣告されたのである。

「あの、姫織さん、お願いだから……」

「グズグズしていると、平手でなく鞭を使いますよ」

上目づかいで少年はメイドを見たが、彼女の青い瞳は、獲物を前にした猫科の肉食獣のような輝きを放っていた。半開きになった唇は舌なめずりする寸前で、サディスティックに微笑んでいる。こういう顔をした時の姫織が本気であることを、優は経験で知っていた。革で編み上げられた責め具がもたらす苦痛を思い出した少年は、ふるふるつと細身の身体をふるわせる。逆らいたいと心では思っているのだが、なぜか身体が言うことを聞かず、言われるままに両手でベッドボードをつかみ、立て膝をつけて尻を後ろに突き出した。そして屈辱のお仕置きを待つ。

「私がいよいと申し上げるまで、手を離してはなりませんよ」

懲罰を受けるために差し出された腰の両脇にメイドの両手がかかる。細く白い指が着衣と肌の間にすべり込み、ズボンとブリーフが一気にずり下ろされた。



「ひゃ……」

寝間着と下着によってかろうじて保たれていた下半身の面目は、ものの見事に丸つぶれになった。穿いていたものを膝まで剥き下ろされ、真っ裸になった尻と股間をメイドに見られているのだ。下半身に外気を感じ、自分の屈辱的な格好を思い知らされる。

（うう……僕、もうすぐ十六歳なのになあ……。高校に入ったら、少しは大人扱いしてくれるかと思つてたのに……）

しかし、子どものようなお仕置きを恥じている優の心とは裏腹に、その分身ともいえる男性器はギンギンにそそり立っていた。きれいな肌色をした肉筒は張りつめてみなぎっており、さながらメイドの視線にさらされたことを喜ぶかのように小さく跳ねている。包皮を押しつけてによつきりと顔を出した亀頭は怒ったように赤くなっており、先端に刻まれた割れ口にはぬらぬらとした透明な粘液が付着していた。肉柱の根本には黒々とした性毛が生い茂っており、股間全体に風格を与えている。

「まあ、優さまつたら、おペニスをこんなに大きくなさって！」

咎め立てするような口調で姫織は言いながらも、白い頬が少しだけ赤く色づいていた。（うう……そんなこと言われたって……）

股間を丸裸にしたまま立て膝の姿勢でいるという、いわばさらし者の刑にされ、幼さの残る面差しをした少年は頬を赤らめる。

ベッドボードを両手でつかんでうつむき加減になっている優は、成熟した美しいメイドが息を飲んで彼の勃起を見つめていることや、そこに投げかけられている視線の意味合いに気づくこともなかった。ただ身を強ばらせながら仕置きの執行におののき、そして、こんな状況になりながらもピンと立っている男根に戸惑っている。

（あああ……姫織さんに見られているっていうのに、僕のあるそこ、なんだか、余計に大きくなっちゃったような……。恥ずかしいはずなのに、どうしてだろう……）

華奢な身体に似合わず逞しい肉根といい、笠を張ってのつぺりとした風貌の肉茸といい、少年の男性器は、彼の顔が童顔であるのと比較すれば立派に大人としての様相を呈している。中性的な容貌で男臭さの少ない優であったが、生殖器だけは既に牡の野性味を備えている。早く女肉の味を知りたい、秘唇を押しかき分けて蜜壺の中を思うさまかき回したいとばかりに、男根は規則正しく脈動していた。

立ちはだかっている肉筒が、いきなり姫織の手で握られる。

「ううっ……」

ベッドボードに手をついたまま、優は快感のために小さく声を発した。美人メイドのひんやりとした指が絡みついてきて、熱くなつた男性器は歡喜してぴくぴくつと跳ねる。

「優さまのおペニス、私が診断させていただきます」

姫織は、硬さを確かめるかのように童貞ファロスを二、三度しごいた。

「ああ……姫織さん……」

密かな憧れを抱いているメイドの手で性器を握られ、高校生になったばかりの男の子は全身から力が抜けてしまうような心地よさに見舞われる。姫織の目を恐れて自慰すらほとんどしない優にとつて、肉筒に絡みついている指がもたらす刺激はあまりにも甘美だった。「こんなに大きく、しかもガチガチに堅くなっているのは、大事な場所に下品な欲望を溜め込んでいる証拠ですわ」

血管を浮き立たせるまでに硬直した肉幹が、しつとりとした感触の手の平によつて根本から雁首までしごき上げられる。かと思うと、ぬるぬる液にまみれている射出口を指先でなぞられたり、小指の先で突かれたりした。男性器を医学的に触診しているという手つきではなく、淫らがましい玩弄以外の何物でもない。

「あつ！ そんなことされたら、あああつ！」

差し迫った声で少年は叫び、裸に剥かれた下半身をよじらせる。

尿道を快楽の波動が貫き、若いペニスは暴発の一步手前まで追いつめられた。極限にまでたぎった亀頭は、すぐにでも白濁液を放出できるように蠕動を繰り返している。陰囊にわだかまっていた精子たちは沸き返り、早く外に放出してくれと訴えていた。

「申し上げておきますが優さま、もしこんなところで白い汁をおもらしになるようでしたら、鞭を使わせていただきますからね」

「そ、そんなっ。あんまりだよ……」

まだ女性を知らない男性器は限界を迎えようとしている。

優は観念した。たとえお尻を鞭打たれても、精液をビュクビュクと吐き出したい。思いっきり射精して、特濃の白粘汁でメイドの手を汚してみたい。

しかし姫織は、ノーブルな美貌に婉然とした笑みをたたえながら、ここぞという瞬間に手淫をやめてしまった。

「え？ ああ……」

優は落胆の吐息をもらす。焦らされるだけ焦らされた勃起は、しごいてくれる手を求めてむなしく跳ね、亀頭の割れ口はピュルピュルと先汁を小噴出した。

「やはり優さまにはお仕置が必要ですよ。私めがお尻を叩いて差し上げれば、溜まっている醜い肉欲も抜けて、優さまのおペニスもきつといい子になりますわ」

懲罰を宣告されたというのに股間に生えている肉棒は勃起状態を維持しており、しかも重力に逆らって急角度で上向いている。

（つていうか、姫織さんにお尻を叩かれると思うと、なんだかかえって……）

少年の困惑をよそに、制服に身をつつんだ美しいメイドは右手を振りかぶる。

「参りますわよ」

木製の背もたれをぎゅっと握って優は痛みに備えた。

以前は両親とともに席についていたのだが、今では独り。

ぴかぴかに磨かれた銀のトレイを手に、メイドが食事を運んでくる。今夜の献立は、野菜たっぷりのビーフシチューとスモークサーモンの香草添え。どちらも幼い頃から慣れ親しんだ味だ。メニューは当然のことのように毎日変わり、飽きるということがない。

たった一人のために日々の献立を変化させるといえるのは、結構大変なことなのではないか、と優はふと思った。傍らにひかえて給仕をしてくれている美人メイドは、そのような苦勞をしている様子は全く見せない。家事の達人である姫織ならではのことなのだろう、と心の中で感謝している。食後には自家製の焼きプリンと紅茶が出た。

夕食のあとは入浴。立花家の館は建てられてからかなりの年月が経っているため、古い西洋建築の雰囲気を残したまま内部の改装がなされている。浴室は、篤志の代に全面的に修理をされていた。天上、床、壁面とも全て白い大理石が貼られており、すべるのを防ぐために床には簀の子を敷きつめている。

「ふう……」

お湯につかりながら、優はゆっくりと息を吐いた。

白亜の人工大理石でできていた湯船は大きく、思いきり脚を伸ばしてもつかえることがない。部活動で溜まった筋肉の疲れがお湯の中に溶け出してゆくかのような爽快感がある。もうすぐ十六歳になる少年の肉体は、大人の男性のそれへと変わりゆく途上にあった。

女性に見間違われることもあるほどにやさしげな顔立ちをしている優だったが、身体つきは日に日に男らしさを増している。

浴槽から出て身体を洗おうとしたとき、脱衣場に誰かが入ってくる音がした。

「優さま、お背中をお流しいたしますわ」

浴室のドア越しに聞こえてくるのは紛れもなく姫織の声だ。

「えっ？ ああ……ええっ？」

素っ裸の少年は、予想もなかった出来事にわたわたと慌ててしまった。握っていた石鹸がふるりとすべり、手から飛び出して浴室の隅に転がる。それに手を伸ばしかけたとき、石鹸を拾うよりもタオルで股間を隠すほうが先だと気づいた。

（ど、どうしたんだらう。姫織さんとお風呂に入るなんて、いつ以来だったっけ？）

大人の女性のシルエットが曇りガラスに映っている。それを目の当たりにしただけで、優の股間は期待感から極めて正直な反応をしてしまった。

「失礼いたします……」

少年は、食い入るような血走った目で細く開いた扉を凝視する。扉の隙間から姫織の素足が見えた。次いで、むっちりとした太腿。そして全身……。

浴室内に入ってきた姫織は、残念ながら裸ではなかった。白い体育シャツと濃紺のブルマーを身につけていたのだ。

青い瞳のメイドがその美貌に悪戯っぽい笑みを浮かべているのを見て、少年は、自分が落胆した表情をしてしまっていたことに気づかされた。

「あ、あの……その……どうして急に……？」

がっかりしてしまったことを誤魔化すために、話題を変えようとする。

「久しぶりに、優さまとお風呂に入りたくなくなってしまった。もちろん一緒に湯船につかるわけには参りませんから、せめてお背中を流して差し上げようと思ったのです」

「その格好は……？ どうしてブルマーを？」

「メイド服よりも、このほうが動きやすいですし、水に濡れても平気ですから。そう思っ
て高校時代の体育着を引っ張り出してきたのですが、少しきつくって。胸とかが」

気品ある美貌に挑発的とも受け取れる妖艶な笑みを浮かべて、姫織は両手で胸のふくらみをすくい上げて見せた。

体育シャツのナイロン地はそれなりに厚手で、ブラジャーなどの線が出ないように配慮がされているのだろう。しかし、女性の羞恥心への気づかいは、ほとんど無駄になっていた。女子校生の胸囲を想定してつくられたシャツは、成熟した大人の女性の乳房を押し込むには小さすぎたのだ。内側に詰め込まれた豊かな乳房によって布地は伸びきり、これ見よがしにふくらみが張り出している。下着のラインは確かに浮き出ていないが、手に納まりきらないほどの大きさや、果実のような丸みは、あからさまにわかってしまう。

少年は生唾を飲み込んだ。

(う……エプロンとブラウスを着ているときよりも、遙かに……)

普段でさえ重たそうに揺れる胸は、体育シャツ一枚にしかつつまれている今、わずかな動きにすらダイレクトに反応して小刻みに弾むのだった。

「ブルマーもなんだか小さくって……」

姫織は、しきりと尻に手をやって、ブルマーのバック部分を引っぱっている。女子校生の頃よりも尻肉は一層のこと女らしさを増しているため、その割れ目に濃紺の布地が喰い込みがちになってしまっているからだ。しかし根本的なサイズの違いはいかんともしがたく、どんなにブルマーを伸ばしてみても臀部の曲線を覆いきれない。しかも、つまんでいる指を離せば、布地はすぐ元通りに縮んでしまう。

「もうっ。仕方がありませんわ」

美貌のメイドは、無駄を悟ったのか、ブルマーを引っぱるのをやめた。美しい丸みをした尻肉は、半分近くが剥き出しにされたままだ。ブルマーの濃紺と尻肌の白が鮮やかな対比をなして、少年の目にまぶしく映っている。もともと、「尻に喰い込んだブルマーを引っぱる」という姫織の動作そのものが、優の胸をときめかせるのだ。

サイズの小さいブルマーは尻に喰い込んでいるばかりではない。姫織の股間にも、ぴっちりと密着している。

いつもならスカートに隠れていて絶対に見る事ができない下腹部。それを間近に観察して、優の心臓は鼓動を速める。今朝、ちらりと覗くことはできたが、あくまで短時間だ。ブルマーを穿いているとはいえ、こんななじつくりと眺める機会に恵まれたことはない。肉づきがよく、それでいながら適度に引き締まった太腿。欧米人の血が半分流れているためか、その肌はまばゆいばかりに白い。濃紺の布地は姫織の股間にきつく喰い込み、恥丘から女性器にかけての斜面を正確にかたどっている。なだらかな盛り上がり帯びた下腹部、特に秘唇があると思しき底の部分を優は目に焼きつけた。

「この歳で体育着っていうのも少し恥ずかしいのですけれど、おかしくありませんか？」美しく官能的なメイドから蠱惑的な笑みを投げかけられて、優は先ほどの落胆をすっかり忘れてしまう。確かに、女子校生で通すにはきつい年齢であった。が、成熟した肢体にブルマーというのも悪くない。白いシャツと紺のブルマーは、年齢制限があるゆえに清楚な感じがして、姫織の肉体の官能美をなおのこと引き立たせているのだ。

（メイド服の姫織さんも素敵だけれど、体操服もすっごく似合ってる。クラスメイトや上級生にだって、あんなグラマーな身体つきの人なんていないし）

憧れのお姉さんが同世代の少女のようにブルマーを穿いている姿を、優はうつとりと見つめていた。ひとりでにペニスが勃起し、股間にあてがわれていたタオルが下から持ち上げられているのにも気づかないまま。

「ぜ、全然おかしくなんかありません。ただ、その……」

「ただ？」

碧眼の美人メイドは少し不安そうな表情をした。やはり年齢のことを気にしているのかもしれない。しかし、優が言いたいことはそんなことではなかった。

「その、頭につけているカチューシャを除けば」

姫織の頬がさつと桜色にそまる。しかし慌てた様子もなく、白いギャザーの髪飾りにそつと手でふれて、愛おしむように撫でた。知っていてつけたままだったのだろうか。

「このカチューシャは……優さまのお母さまから頂戴したもののなのです。初めてメイドの制服をくださったときに、手ずからつけていただきました。ですから、就寝するときと入浴するとき以外は外さないようにしているのです……」

「そうだったんだ……」

「はい。ですから、悪戯をしないでくださいね」

少ししゅんとした少年を元気づけるように、姫織は明るい声を出す。

「さあ、お背中をお流しいたしますわ。タオルをお貸しくださいませ」

おもむろに伸びてきた白い手が、股間を隠していたタオルをつかんだ。

「え、このタオルはだめだよ。だめだったら……わひゃっ！」

不意のことでほとんど抵抗できなかった。

奪い取られる瞬間、布地によって亀頭を強くこすられ、情けない快楽の声を上げてしま
う。覆いがなくなつた下腹部では、力強くそそり立った男根がびくびくと跳ねていた。

「あらあら、優さまつたら。今朝、あれほどお仕置きをして差し上げたのに」

「う、それは……その……だつて……」

高校生になつたばかりの男の子は、ぴよこんと起き上がっている股間のことを両手で隠
した。肩をすぼめ、内股気味になりながら、モジモジとしている。母のことを思い出して
少し消沈しかけていた優だったが、彼の息子は元氣満々だったというわけだ。

「お尻を打つただけでは効果がなかつたようですね。でしたら、今度は直接におペニスを
舐める必要がありますね」

氣高く貴族的な姫織の顔には、かすかな微笑みが浮かんでいる。しかし、優が見たところ、
年上のメイドの表情は、あまり怒っているようには感じられなかった。

「ですが、お仕置きはまた後ほど。お背中を流しますから、椅子に座ってください」

「う、うん……」

洗つてもらっているうちに少しはペニスも大人しくなつてくれるかも、などと思いが
ら優は椅子に腰かけた。メイドの手が背中をゆつくりとこすつてくれる。

(それにしても、姫織さんもひどいよ。僕のチンコが勃つていると怒るくせに、いつもセ
クシーな服を着てるんだもんな。もしかしてわざと？ まさかね……)

タオルが背中をこする心地よい感覚に身をまかせながら、そんなことを考えたりする。

「優さま、ついでおペニスも洗って差し上げますわ」

「えっ？ いい今、なんつて……？」

予期せぬ事態の波状攻撃に、頭の回線がショートするくらいに優は混乱してしまった。

「優さまも間もなく十六歳。大切な所を清潔にしていなと、いざというときに困りますわよ。ペニスの洗い方、私がお教えいたしますわ」

狼狽する優をよそに、体操着姿のメイドは少年の背中越しに股間へと手を伸ばす。

「四の五の言っていないで、手をおどけください」

ペニスを隠している少年の手をどかさうとした拍子に、姫織の巨大な胸のふくらみが背中らにびったりと押しつけられた。

ふにゅん。

裸の背中に感じたやわらかな肉の存在。体育シャツとブラジャーを通してさえ、乳房のたつぷりした量感と、七分立てのホイッププクリームのようなやわらかさが伝わってくる。

(ああああああ……姫織さんの、姫織さんの胸え……)

優の思考はボンッと弾けて、脳みそはオーバーヒートしてしまった。身体は金縛りにかかったようにガチガチになっている。姫織は、少年の手をそつとどかせた。そこに起立している肉の御柱も、鉄でできているのかと思うほどに硬直している。

「失礼いたします……」

男性性器を洗うために差し伸べられた手には、タオルは握られていなかった。

素手である。きめ細かく泡立てられた石鹸の泡をたつぷりとすくい取った手が、壊れ物でも扱うようにそつと陰囊を包み込んだ。そのまま、二つの玉を掌中で転がすようにやわやわと揉み洗いされる。

「はうううう……」

男としての急所中の急所を、憧れのお姉さんにゆだねているのだ。かすかな緊張感が喉元にこみ上げてくる。そして大いなる安心感とともに心地よさが広がってきた。

それから、堅くなつた肉胴の根本をきゅつと握られる。泡をまぶされた指が絶妙な力加減で絡みついてきて、ぬるぬると茎部がしごき上げられた。自分でするよりも遙かに気持ちのよい刺激がペニスを襲い、海綿体は充血の度合いを高める。メイドの指がもたらす快感をよるこぶかのように、まだ女肉を知らない男根がビクビクと力強く脈動した。

「ここは垢が溜まりやすい場所ですから、特にしっかりと洗わなくてはいけませんよ」

亀頭の笠の裏側を、成人女性の指先によってやさしくこすられる。普段は肉幹の包皮と接しているので刺激を受けないため、肉鈴の根本のくびれ部分は敏感に反応した。

「あうううう……そ、そんなとこまでえ……」

雁首の周囲をねつとりとなぞられると、快感のあまりに優はよがり声を放ってしまう。



先端の割れ口が小刻みに収縮して、ねばねばした透明な先汁が滲み出た。肉の張り出したり裏筋の縫い目をかきこするようにする指づかいは、洗うというよりも愛撫しているというほうがふさわしい。強すぎず、かといつて弱すぎもせず、優の感覚とシンクロしているのではないかと思うくらいにちょうどよく、蕩けるような快感が男根を満たす。

「まあ、せっかく洗ったのに、お汁がしみ出てきてしまいましたわ。ついでですから、きれいにしましょうね」

みなぎりきって丸々とふくらんだ亀頭が、密かな憧憬を抱いている女性の手でくるみ込まれた。全体的なマッサージのあと、発射口だけを指腹で丁寧にこすられる。

「洗っているそばから、また粘液が出てきて。これではきりがありませんわ」
咎め立てするように言っているが、どこかからかうような口調だ。

「そんなこと言われても……姫織さんが……あうっ」

優を興奮させているのは、肉棒への洗浄奉仕だけではない。背中に押しつけられているやわらかなふくらみによるのも大きかった。背中越しに少年の股間を洗っているとはいえ、少し手を伸ばせば届くはずだ。しかし、ブルマー姿のメイドは、不必要なまでに優の背中に身体を密着させている。その上、頻繁に身体を揺すって、やわらかで巨大な胸の隆起をこすりつけてきた。その大きさを少年に誇示して、挑発しているかのよう。

「ああああ……もう、もう……」

高校生になったばかりの男の子は、差し迫った声を上げた。出そうで出ないくしゃみに焦れているような感覚に苛まれる。ブルマーを穿いた姫織の姿を見て勃起したペニスは、メイドの手管によって暴発寸前にまで追い上げられていた。

しかし、あとほんの少しというときに、またしても姫織の手はいなくなってしまう。

「はい。おしまいです。おチンポはもう十分にきれいになりました」

「えっ？ こ、こんな状態じゃ……」

「こんな状態ではなんだというのです？」

「いえ、別に……」

優はうつむきながら口ごもる。我慢できず射精したい、などとは口が裂けても言えない。

「でしたら結構ですわ。私はこれで失礼しますが、ごゆっくりどうぞ」

憧れのお姉さんは浴室を出ていってしまい、ペニスをむなしくいきり立たせた少年が独り取り残された。結局、煮えきらないままに優は風呂を上げる。

二階の勉強部屋に戻る前に、調理場で後かたづけをしていた姫織に声をかけた。風呂から上がったことを伝えるためだ。肉感的な肢体のメイドは、まだブルマー姿でいる。

「姫織さん。お風呂、上がりました」

「そうですか。では、私はこれから入浴させていただきます。くれぐれも、覗こうなどと思ったりいたしませんように。もし不心得を起こしでもしたら……わかっていますね」

「アンダーショーツが見あたらなかったもので、そのまま着たんですが、股間の所がおかしくなっていますか？」

今度は、思いつきり腰を前に突き出してみせた。お湯に浸っている少年のちょうど目の前に、たった一枚の薄い化繊地にしか覆われていない陰部を突きつける。まるで見せつけているかのような大胆さで。

「そ、それは……」

全裸の男の子は、メイドの下腹部をじつと見つめたまま口ごもる。

「いかがでしょう。忌憚のないご意見をお聞かせください」

色香を漂わせた声音でそう伺いながらも、自身の股間がどういう状態になっているかを、姫織は私室の鏡で見えていたのでよく知っていた。

スクール水着だけあって、きわどい肌がはみ出ているということはない。

しかし、あまりにも大きいものが胸部に押し込まれているために、そのしわ寄せが別の部分に現れて淫猥な風情を醸してしまっている。つまり、アンダーショーツなしで、水着の薄い布地が股間と尻にきつく喰い込んでいるのだ。

尻肉の割れ目に生地がもぐり込みがちになるのはブルマーの時と同じである。なめらかなで白い尻の一部分は、レッグホールから絞り出されるような感じで、ぷにゅとしたはみ出し肉を形づくっていた。しかし、それだけなら少し恥ずかしいだけで済む。

問題は股間だ。

水着は身体にぴったりとフィットすることを前提にしているので、身体の凹凸をあからさまにかたどってしまふ。それゆえ、下腹部の最も底のあたりに、キウイフルーツを薄くそぎ取ったかのような楕円形の盛り上がりが出てきた。やわらかな丸みを帯びた肉土手は左右二つに割れており、中心に走る縦筋が濃紺の化繊にはくつきりと浮き出ている。

(あそこの盛り具合、ご覧になれますでしょうか、優さま……)

股間を突き出したまま小さく尻を揺すって、年若いご主人さまを大人の色気で挑発した。スクール水着をまとったメイドは、腰をふっているだけでさえ、かすかに喘ぎをもらしてしまふ。水着の喰い込みがきついたために、わずかばかりのずれですら強烈な刺激となって女唇を愛撫するのだ。浴室に来る前から高ぶっていた姫織の肢体は、すぐにはしたくない欲情の汁をもらし始める。布地が濃紺なので濡れ痕が目立たないのがせめてもの救いだ。

湯船の中のご主人さまが、男臭さのない中性的な顔を真つ赤にしながらさり気なく膝を立てたのを見て、メイドは密やかな満足感を味わう。

(優さま……私の水着姿を見て、勃起してくださったのですね……)

身体に浴びる視線が心地よい。若い牡の獣欲は、時に鞭となって乳房を打ち、時に無数の細い触手の束となって下腹部を這いまわった。世間一般の男性が向けてくる視線はいとわしいだけだが、たった一人、優の眼差しだけが姫織の身体を火照らせる。

「お背中を流しますわ。どうか、湯船から上がってくださいませ」

「う、うん……。じゃあ、お願い」

少年は、タオルで股間を押さえながら出て、浴室用の椅子に腰を下ろした。いきり立った男根が天を衝いているのをはばかりか、膝を抱えるようにしている。太腿の付け根にタオルをかけているのだが、肉棒によって露骨に突き上げられていた。

水着姿のメイドは、若い主人と向かいあうようにして彼の足元にひざまずく。そして、そのふるまいをやんわりとたしなめた。

「優さまはご立派なものをお持ちなので、そのようにコソコソとペニスを隠してはみつともないですわ。もつと堂々となさってください」

うつむかずに胸を張り、ゆつたりと脚を開くように、と姫織がアドバイスをすると、若いながらも貴人の風格が出てくる。メイドは、両手でうやうやしくタオルを取り去った。

隆隆とそびえ立つ肉柱があらわになる。太さといひ長さといひ、そして亀頭の鯉えらの張りようといひ、つい昨日に童貞を失ったとは思えないほどだ。

「すごい……何度拝見しても、気圧されてしまいそうですわ……」

自分を女にした男性器を青い瞳で見つめながら、姫織はうっとりとおぼやく。

「主たる者は、ペニスでメイドに罰を与え、また、ペニスで褒美を与えるのです。ですから、恥ずかしがらず、誇示するぐらいのつもりでいらしてください」

蠱惑的な上目づかいで、上に立つ者としての心がまえを姫織は説いた。

「では、優さまのお身体を洗わせていただきますわ」

スクール水着の肩紐に手をやって、片方ずつ肩から外してゆく。そして水着の胸部を剥き下ろした。たっぷりとした豊乳が、締めつけから解放されたことを喜ぶように、ぼゆゆんと弾みながら出る。

並はずれた大きさを誇つていながら、重力に逆らつて、なんの支えがなくても前方に突き出していた。きめ細かくなめらかな乳肌は、まばゆいばかりに白く輝いている。官能的な暗赤色をした乳輪は、乳房の容積からすればやや小さめだ。そこにのつている乳首は本体の豊かさに恥じぬ大きさで、しかも興奮しているので、淫らがましく身をもたげている。ピンとしこり立つている様子は、刺激を求めているようにさえ見えた。

「ふう……胸が苦しくつて。やっと楽になれましたわ」

優の眼差しを意識しながら丸い肉塊を両手ですくい上げ、量感を誇示するように揺すつて見せる。そういうえば昨夜は乳房を披露することなく朝を迎えてしまった。密かな自尊心を抱いている胸乳に、愛おしいご主人さまの熱い欲望の視線を浴び、嬉しさでますます乳首が硬くなる。

「殿方の身体を洗うには、女性の乳房が最も適しております。メイドとして仕えることをお誓いしましたからには、これからは私が胸でご奉仕いたしますわ」

「う、うん……」

言葉すくなく返事をする少年。しかし、彼がそれを喜んでいるであろうことは、やさしげで大人しそうな顔が上気していることや、いつもは知性をたたえている瞳が野性味にあふれた輝きを放っていることから窺い知ることができた。強ばりきつた肉柱が下腹部を打たんばかりに仁王立ちしているのは、欲情に駆られていることの名よりの証拠だ。

姫織はポディーソープの容器を手にとると、その中身をたっぷり乳房にぬり広げた。「優さま。私の胸を揉んで、お好みの加減に泡立ててくださいませんか？」

カチューシャをつけた頭を少しかしげて、とびっきりの笑顔を浮かべる。ご主人さまの脚の間に両膝をそろえてついたらまま、上体を傾けて豊潤極まりない乳房を差し出した。

初めは少しだけ戸惑った様子だったが、こわごと両手を差し伸べてくる。手の平には到底おさまりきらないサイズの乳肉をつかみ、そのやわらかさを味わうかのようにゆつくりと揉みこねた。吸いつくようになめらかで瑞々しい感触。手の中で溶けてしまいうなやわらかさでありながら、指をはじき返すような弾力がある。

ポディーソープで手をぬるぬるにしながら、少年は飽くことなく初めて直にふれる乳房を心ゆくまで堪能しているようだ。

「ん……はああ……んうう……はふう……あんっ……」

薄く紅を引いた唇から、かすかな喘ぎがもれる。

いくら胸を揉まれているとはいえ、泡立てるためと言つて差し出した手前、あまりにも簡単に嬌声をもらしては、はしたない女だと思われてしまいそうだ。しかし、いくら声を抑えようとしても、わずかにこぼれた吐息ですら浴室の壁に反響してしまい、なかなか鎮まらぬ。それを恥ずかしく思う気持ちが身体を熱くし、感じやすくなった乳房はさらなる喜びを貪る。

淫らな螺旋に巻き込まれた姫織は、豊かな胸乳を少年の手にゆだねたまま身悶えしていた。大きな肉の塊がそのまま快楽の受容器官と化しているので、こねまわされるたびに官能が噴き出すのだ。青い瞳は南国の海のように煌めき、気品漂う優雅な美貌は頬が桜色にそまっている。見事なプロポーションを誇る肢体は歓喜にわななき、流れるように長く黒い直髪はわずかに乱れた。

初めのうちはぎこちなく胸をこねていた優だが、姫織が感じているらしいことを見てると、いきなり手つきを激しくする。性的好奇心の赴くままに、やわらかな肉はひしゃげ、押し潰され、あるいは縊^{くむ}り出された。

「あひいいつ、いけませんっ。もつとやさしく、やさしくしてくださいませっ」

長い黒髪が波打つ。紺の水着姿でいたメイドはたまらずに身をよじらせた。それでもきちつと両膝をそろえて、健気に立て膝の姿勢を保っている。自身の両手を持ち上げようとせず、豊かな乳房を若い当主に捧げ続けていた。

「んっ、あひい、はああああっ」

痛くて叫んだわけでは、必ずしもない。やわらかな肉を乱暴に嬲られてさえ、相手が優だと思うと、痛みは一瞬の後に痺れるようなジンジンとしたうずきとなるのだ。豊潤な二つの乳房はぶつかりあい、谷間の肌がこすれあい、ボディーツープが泡立つのと同じように性感が湧き起こる。

「ひいっ。そこ、そこだけはお許しください。乳首だけは……あんっ」

ぷっくりとふくらんだ乳蕾が、若く旺盛な性欲の餌食となる。根本から指でつままれて、すり潰されたり、しごき上げられたりした。

「お願いですから……乳首、弱いんです。どうかお許しを……」

恥ずかしい告白をして、メイドは主人の慈悲を乞う。

しかし、女体を知って間もない男の子がそんなことに耳を貸すはずもないことは、姫織もよくわかっていた。弄ばれるままに突起を差し出し、肉欲の丈を受け止める。

しこって敏感になっていた乳首は、牡の獣に蹂躪されてよがり啼いた。鋭い快感が弾け、乳が噴き出たかのような錯覚に襲われる。官能の炎で身体をあぶられたメイドは、力が抜けて立て膝の姿勢を保つことさえできなくなり、ご主人さまの胸板にしなだれかかった。年下の少年に胸を嬲られて、性に臆^{おそ}れた大人の女性は心ならずも軽く気をやってしまったのだ。

「あ……失礼いたしました……」

優の胸板は意外にがっしりとしていて、そこに頬を寄せている姫織はほんのりと目元を赤らめる。もつとこうして抱かれていたいが、ゆつくりと立ち上がった。

「優さまのおかげで、十分に泡立ちましたわ。まず、お背中から……」

浴室の椅子にかけている少年の背後にまわり、メイドはそつと寄り添う。はだけた水着からこぼれ出た乳房は、ボディソープの泡とぬるつきにまみれていた。豊かな柔肉を自らの両手ですくい上げ、主人の背中にむにと押しつける。上半身を上下させ、時には円を描くようにしながら、女体の中でも最もやわらかい乳肌をこすりつけていった。

「んっ……んんっ……はぁ……んっ……」

ひとりでに艶めいた吐息がもれてしまう。

ご主人さまの身体をこすっているだけで、胸を中心に快楽の細波が立つのだ。とりわけ頂上でしょつっている蕾は、ピクピクとわななきながら貪欲に刺激を取り込んでいる。

（いやだ……私ったら、ご主人さまの身体を洗っているだけなのに……気持ちよくなってしまう……ああああ……ん……はぁぁ……止まらない……）

意識には薔薇色をした靄がかかり始めていた。

今、メイドが行っているのは、主人への奉仕を装った自慰である。優を誘惑して虜にするつもりでいた姫織だが、このままだと自身が先に溺れてしまいそうだ。

（だ、だめよ。優さまを他の女に獲られないためにも、気を確かにもって、私の肉体のよさを教えてあげなければ。そうよ。優さまの身体に教え込んで差し上げますわ）

情熱的で甘美な想いを秘め、姫織はなおのこと心をつくして胸を擦りつけた。青い瞳を歡喜に潤ませながら、自慢の乳房で主人の身体をマッサージしてゆく。

「優さま……私の胸……んっ……いかがですか？ ……はあ……」

こらえきれない喘ぎに言葉を途切れさせつつも、主人にお伺いを立てた。というよりも、自分の胸への讃辞を優の口から引き出したかったのだ。

「うん……。とつても。やわらかくて、大きくって……」

「おそれいります。私の乳房は優さまのものでですから、ご所望の時はいつでもご遠慮なくお申しつけください。もちろん胸に限らず、唇も、あそこも……」

ことさらに少年の耳元に唇を寄せ、ささやきとともに耳の穴に息を吹き込む。

背中を洗い終わると、水着姿のメイドは少年の腕に取りかかった。乳房の間に挟み込んで、両側から押しつけるようにして洗ってゆく。この春から運動部に入った優の腕は、そこはかとなく男らしさを漂わせ始めていた。上腕部の雄々しさを胸の間で感じ、肉体を捧げて浴室奉仕をする喜びがふつふつと湧き上がってくる。

そして、いよいよ身体の正面。

椅子にかけた優の前にまわると、姫織は立ちポーズをとって扇情的な半裸を披露した。

濃紺のスクール水着は飾り気も色気もないのだが、女神のように美しく成熟した肢体を引き立てている。はだけた胸元からこぼれている乳房は、はちきれんばかりの大きさを誇りながらも、垂れることなく挑発的に突き出していた。アングロサクソンの血を承けた証である白い肌はボディー洗い奉仕のために泡まみれになっている。ボディーソープの泡でぬめ光り、濃い赤色をした乳蕾が鮮やかに輝いて見えた。

ご主人さまの顔色は、と様子を窺うと、椅子にかけた少年は顔を赤らめてどぎまぎとしている。もちろんペニスには垂直に勃起していた。

(あんなにおチンポがそり立っている。私の身体に欲情してくださっているのね……) 少年のあからさまな肉体的反応が、大人の女性に深い自己陶醉をもたらす。

「……では、お身体の正面を洗わせていただきますわ」

魅惑の肢体を熱く火照らせつつ、美貌のメイドは、存在感たっぷりの巨大な乳果実を両手ですくい上げた。そして支配者である優の脚の間で立て膝になり、逞しさを増しつつある男の子の胸板に豊かな乳房をむにと押しつける。雪のように白く、それでいながら微熱を孕んだ柔肌で、ご主人さまの胸部から腹部までをこすった。しなだれかかるように身を寄せて上半身を上下させる。と同時に手の平で胸を揺すぶり立て、吸いつくような肌ざわりの肉塊に円運動をさせた。

「あああ……優さまの身体、いつのまに、こんなに男らしくなられたのですか……」

愛しい優と向きあい、間近で互いの顔を見合わせていると、成人女性の肢体には一層のこと興奮と喜びが満ちてくる。

身体同士を正面から合わせているため、臍のあたりに硬いものがぶつかつた。それは、姫織を本物の女にした男性器である。筒状の太く長い器官は、時折ビクンビクンと力強く脈動し、女の下腹部を打つ。その動きはさながら欲望の表明。スクール水着を通してさえ肉棒の熱が伝わってきて、牡としての欲求が溜まりに溜まっていることを知らされる。

「ふふふっ……優さまのおチンポ、お待ちかねのようですわね」

浴室の簀の子に太腿と尻をぺたんとして座り、上目づかいで若当主を見上げた。

「遅くなって申し訳ありません。殿方の一番大切な所ですから、じっくりと洗いますわ」いきり立っている男根を、ぬめり輝く豊饒の乳肉で包み込む。片手で握りきれないほどに太い肉胴を、乳房の間に挟んでやわやわと揉み洗いました。左右の胸を交互に前後させて擦りつけたり、上に下にと扱いたり……。

手の平におさまりきれないほどに大きい肉山の狭間に、十六歳のペニスほぼ埋没していた。だが、胸の合わせ目から龟头だけがよつきりと頭を出している。

「まあ、優さまつたら……」

サファイアのような青い瞳が蠱惑的な光に瞬いた。気品ある秀麗な顔には、優だけに見せることのない淫らな微笑をたたえている。



純粹な恋情と牝の淫情を込めて、ご主人さまの鈴口にそつと口づけした。

「はうっ！ うう……う……」

快楽の不意打ちを受けて少年は呻く。膝に置いた手が小さくふるえていた。

乳房で男性器を包み込まれているだけでさえ、童貞を卒業したばかりの初な十六歳にとっては刺激的すぎたのだ。それに加えて、暖かくやわらかな唇の粘膜を亀頭に感じ、興奮のあまりに肉男砲が暴発してしまいそうになる。

「うううっ……姫織さん……そんなことまでしてくれるなんて……」

「ご主人さまの性器に接吻するのは、メイドとして当然の務めですわ」

豊かな胸の谷間で男根をくるみ込みつつ姫織は、快楽に歪む優の端正な顔を見上げた。

「いつでもどこでもご下命くださいませ。喜んで奉仕をさせていただきます」

先端の小さな割れ目には透明な体液が滲んでおり、若い牡がおいしそうな女体を前にして強いられた我慢のほどを物語っている。それが愛おしくてたまらず、姫織はついばむようなキスを何度もそこに降らせた。蜜を貪る蝶のように、唇を尖らせて亀頭の頂上に吸いつく。そこが尿を放つ穴であることなど、全く気にしていない様子で。

「あああ……優さまのペニス……とつてもおいしいです……」

溜息をつくようにささやく間も、姫織の唇は亀頭にふれたまままだ。もちろん両手は自身の乳房を揉みこねており、主人のペニスをあやし続けている。

そのまま唇を離すことなく、唾液にぬめる舌を差し伸べて、丸々と太った肉茸をれろれろと舐めた。のっぺりとした粘膜の斜面に満遍なく舌を這わせ、鯰笠の裏側をも忘れることなく丁寧に清める。

ちゆく……ちゅば……にちゅ……。

気高い美貌に心からの敬意を込めて、年下のご主人さまに唇を供した。女として征服されきった顔つきで、男性の象徴に仕える。ボディソープの香りに混じって、若い牡の臭気が肉棒から立ち上っていた。それがまた姫織の牝をあおる。

頭上にのった純白のカチューシャが舌づかいに合わせて小さく揺れ、真っ直ぐに長い黒髪は微細に波打っていた。荒い鼻息で龟头をくすぐる。

「ん……あっ……んんっ……んふううう……んっ……」

乳房の内側を熱く堅いものでこすられ、優の下腹部で乳首が押し潰され、舌を捧げている最中だというのに喘ぎがこぼれてしまう。微弱な快楽が絶えることなく与えられ、成熟した女肉は弱火で煮込まれたような状態になっていた。もうこらえきれない。このままでは、胸だけで登りつめてしまいそうだ。

それはご主人さまも同じらしい。ペニスの発射孔は小刻みに収縮しているし、そこから新たな先汁が湧出している。少年の息づかいも差し迫っていた。

「ひ、姫織さん、ああああ……もうっ、もう出そうだよおっ」

しかし、美貌のメイドは、どうぞお出してくださいとは言わなかった。涼やかな目元を性悦に色づかせながらも、凜として厳しい女教師の顔つきになる。

「なりません。もうすぐおチンポを洗い終えますから、それまで我慢してください」

「そ、そんなのつてないよ。さつき『ご所望の時はいつでも』って言ってたのに」

「いいですか、優さま。メイドの奉仕を泰然として受けるのも、紳士として欠かせないたしなみの一つです。それができないとおっしゃるのでしたら……」

姫織は、自分の背中に手をやる。長髪の下に隠れて目立たなかったが、スクール水着の生地は、腰のあたりが不自然にふくらんでいた。ちょうど握り柄の形に。この浴室に来る前に、水着の背中に愛用の品を忍ばせてきたのだ。

メイドが手にしているのは、黒一色の一本鞭。

「ひっ！」

少年の短い悲鳴が浴室に響く。

これまで姫織にされてきたお仕置きを思い出して、反射的に叫んでしまったのだろう。だが、そのわりには、十六歳の初々しい男根はいささかも萎えることはなく、それどころかピクピクと小さく跳ねてさえいる。鞭での躰を待ち望んでいるように見えるのは、姫織の願望にすぎないのだろうか。

豊満な乳房をぶるんと大きく揺すらせて、半裸の姫織は立ち上がった。

ご主人さまの背後にまわり込んで、背中から抱きつく。わざと胸果実を背中に押しつけながら彼の両手首をつかみ、その腕を後ろ手にねじり上げようとした。

「痛たた……な、なにを……」

背筋に感じるやわらかい感触に一瞬だけ気を取られたものの、優は激しくあらがう。

素っ裸の少年と、白い肢体にスクール水着をまといつかせた女は、浴室内でもみあった。華奢な男の子が身をよじるのに合わせて、股間の勃起が揺れる。

「大人しくしてください。これも、紳士になるための性教育の一環ですわ」

姫織は、ご主人さまの耳孔に息を吹き込むようにしながら、甘くささやく。腕の中もがく少年が、細身の外見のわりには意外に力強いことを頼もしく思いながら。

（今までは力まかせにお仕置きしてきたけれど、そろそろ限界かしら。優さまも、今年でもう高校生ですもの。欲情した優さまに組み伏せられるっていうのも……）

などと妄想しながら姫織は美貌をほかにそめた。少年が身をよじるたびに乳房がこすられ、艶めいた声が出そうになる。しかし、それをぐつとこらえて、女教師としての声音を準備した。清く、厳しく、毅然として。それでいながらどこかで男の甘えを許し、背徳の官能を匂わす存在を心がける。

「あくまで優さまが逆らうおつもりでしたら、私といたしましても心苦しゅうはございませぬが、おペニスを鞭で打たせていただきますわ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫は、全編の方向性をきまめる

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!